

「焚きあまし」
ひやけき朝の露原
あしにふみ、なにか
えがたきしたころやむ
(「海やまのあひだ」)
釈 遥空

国学院大学 令和4年11月20日(日) 定期号(毎月20日発行) 1部20円
[発行]国学院大学 [編集]総合企画部広報課 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目 [電話]03(5466)0130 [FAX]03(5466)0528

祭儀 ■ 月次祭・新嘗祭 12月1日(木) 午前10時 神殿

国学院大学創立140周年

知を創造し 未来をひらく



学校法人国学院大学は、明治15(1882)年11月4日に母体である皇典講究所が開校式を挙げてから140周年を迎えた。

社会を見れば少子高齢化や人口減少はいうに及ばず、経済格差の拡大、地方の衰退、温暖化による自然災害の増加、近隣諸国をはじめ国際情勢の不安定化などさまざまな課題に直面している。こうした社会にあって本法人・大学は、創立150年に向けた次

の10年をどのように取り組み、どのような人材を世に送り出そうとしているのか、そのための教育、研究、経営は。

折しも学校法人国学院大学では令和4年4月、新たな中期5カ年計画をスタートさせた。「創立150周年に向けて、法人組織を強化するとともに、絶えず変化する環境に対応できる人材を積極的に養成し、社会に貢献する学校法人を目指す」という法人

の基本方針の下、本学をはじめとする各傘下校が将来像と教育目標を定め、達成に向けて取り組みを進めている。大学では、「知の創造。日本をみつめ、未来をひらく」を将来像に掲げる。

経営と教学のトップに、節目を迎えた今の思い、中期5カ年計画の実現への意気込みを聞く。

4・5面に関連記事

皇典講究所飯田町校舎(明治41(1908)年竣工)

文化功労者

院友・山本東次郎師、 元助教授・安藤元雄氏を選出

政府は10月25日、令和4年度の文化功労者20人を発表した。本学の関係者からは、院友(卒業生)で能楽師の山本東次郎師(昭36卒・69期日文)と元助教授で詩人・フランス文学者の安藤元雄氏が選ばれた。

山本師は、昭和12年生まれ。天保7(1836)年に発し、徳川幕府の式楽を伝承する狂言大蔵流山本家の第四世・東次郎。昭和17年に初舞台、47年に東次郎を襲名し、長く一線活躍している。平成24年には人間国宝(重要無形文化財保持者)に認定されており、今年4月には旭日中綬章を受章。今回の選出は、長年にわたる上演が途絶えていた演目の復活に取り組む一方、新作も発表するなど狂言の伝統を継承しつつ発展・振興に努めた点などが評価された。

安藤氏は、昭和9年生まれ。40年に本学文学部専任講師となり、42年に助教授。48年3月まで教鞭をとった。戦後現代詩の第一人者として、56年に詩集『水の中の歳月』(思潮社)で優れた詩人に贈られる高見順賞を受賞したのを皮切りに、数々の賞に輝き、平成14年には紫綬褒章を受章。フランス文学の翻訳者としても高い評価を得ている。

文化功労者の顕彰式は11月4日に都内のホテルで行われた。

みはるかすもの

11月8日に夜空を見上げた方も多かったのではないだろうか。この日、1年半ぶりに国内でも観測できる皆既月食があった▼渋谷キャンパスでは、学生が月を探す姿が見受けられた。普段はせわしなく人が行き交う渋谷駅周辺でも、多くの人が立ち止まり、ビルの際間に月の満ち欠けを眺め、スマホのカメラに収めていた▼日本最古の月食に関する記録は『日本書紀』によるもの。確実なもの、天武天皇9年11月16日、西暦では680年12月12日に起きた部分月食を記している。実に1300年以上も前だ▼ほかに多くの歴史

書に記されているように、遙か昔から、この天体現象が人々の関心事とあることに変わりはないということだろう▼「君子の過ちや、日月の食の如し。過つや人皆之を見る。更むるや人皆之を仰ぐ」―論語の一節だ。「君子が過ちを犯すと、日月食のように人々は注目する。改めるに君子を見て、再び尊敬を抱く」という趣旨だ▼何も君子に限った話ではなく、誰にでもあてはまる。日々を過ごしていく中で、何かしら過ちを犯すことは誰にでもある。だが、大切なことと分かっていても、素直に認め、改めることは時に難しい▼次に日本で皆既月食を見られるのは令和7年9月だ。3年後、月を眺めつつ、少しだけ自らを振り返る機会としてみてはいかがだろうか。

主な内容 2面/創立記念祭・関係者故者慰霊祭を執行 3面/彬子女王殿下ご臨席のもと記念式典
4・5面/創立140周年 理事長、学長に聞く 6面/神道文化学部開設20周年 西岡学部長に聞く 7面/令和5年度 学費一覧
8面/渋谷区長への施策提言コンペ 学生が課題解決へ向け熱弁 9面/3年ぶりに院友が母校に集う 10面/インフォダイジェスト

KOKUGAKUIN
UNIVERSITY
140th 1882-2022



最終面から K:DNA I面/全日本大学駅伝準優勝 総合力で初の表彰台 II面/2シーズンぶりリーグ制覇 三つ巴の優勝争い制す

創立記念祭・関係物故者慰霊祭を執行



【関係物故者慰霊祭】学生による「慰霊の舞」の奉仕



【創立記念祭】140周年を迎え、更なる発展を祈念

■更なる発展を祈念

学校法人国学院大学は、11月4日に母体である皇典講究所の創立から140周年を迎えるにあたり、1日に創立記念祭と関係物故者慰霊祭を渋谷キャンパスで執行した。

創立記念祭（斎主：大野靖仁 神楽奉斎員・法人事務局参事）では、佐柳正三理事長、針本正行学長ら法人、大学の役教職員らが参列。祭典では、祝詞奏上に続き、神道文学部学生による「浦安の舞」が奉仕され、本法人と傘下各校の発展を祈念した。

関係物故者慰霊祭（斎主：北澤薫 神楽奉斎員・神道研修事務部長）では、創立以来、物故した役教職員や学生・生徒、とりわけこの1年間に亡くなった法人各校の関係者の御霊を迎え齋行された。神道文学部学生による「慰霊の舞」が奉仕され、佐柳理事長、針本学長に続き、遺族らが祭壇に玉串を捧げ拜礼し、物故者をしのんだ。

■理事長らが展墓・遷葬

創立記念日に先立ち、展墓と遷葬式が行われた。

10月26日には、佐柳理事長・針本学長はじめ役員らが、豊島岡御墓所に皇典講究所初代総裁・有栖川宮熾仁親王と高松宮宣仁親王・同喜久子妃を参拝した。また、護国寺檀徒墓地において皇典講究所初代所長・山田顯義伯の展墓を行った。

10月25日には、歴代の皇典講究所の総裁、副総裁、所長をはじめ、理事長、院長、学長ら先徳の御墓を遷葬する遷葬式が渋谷キャンパスで執り行われた。この式は10年に一度、行われている。当日は佐柳理事長はじめ役教職員らが参加し、それぞれの御墓を遷葬した。

永年勤続者を表彰



学校法人国学院大学では、創立記念日を迎えるにあたり、11月1日に渋谷キャンパスで勤続45・40・30・20年の節目を迎えた法人・傘下各校の教職員を表彰した。当日は佐柳正三理事長から表彰状が手渡された。対象者は47人。

【勤続45年】丸山典子（大学）

【勤続40年】大野靖仁、白川博一（以上法人）、平野泰樹、牧野多聞（以上国学院大学北海道短期大学部）、中村彰伸（国学院高校）

【勤続30年】吉田敏弘、山西治男、捧剛、橋元秀一、高木康順、小林博毅、石田智子、豊口祐美子、相川由起、斉藤正一（以上大学）、杉田隆時、前井直美、星野真人（以上国学院高校）、荒木まみ子、清水敦子、鈴木洋行、笛田信一（以上国学院大学久我山高校）、阿久津拓生（国学院大学久我山中学校）

【勤続20年】岩瀬由佳、針谷壮一、田原裕子、中馬祥子、西岡和彦、松本久史、村越美里、吉井浩久、千家慶子、山口洋子、牧野利春（以上大学）、山寺三知（国学院大学北海道短期大学部）、大平剛、新祐介、有岡孝、瀬立聡、豊住陽介、佐藤晴雄、奥野和則、青木伸浩（以上国学院高校）、横山聡、吉田勝（以上国学院大学久我山高校）、杉田貴之（国学院大学久我山中学校）

記念誌刊行と博物館企画展 創立140周年祝う

学校法人国学院大学は創立140周年を迎えるにあたり、周年記念誌を刊行したほか、国学院大学博物館が企画展を開催し、周年の節目を祝した。

■10年の歩み振り返る

「国学院大学140周年記念誌」

誌』（A4判・230頁・非売品）が11月4日、刊行された。写真左。

この記念誌は、平成24年に迎えた創立130周年からの10年間にわたる法人の歩みを編み込んだもの。社会の変化が著しい中、大学部門での人間開発学部

子ども支援学科の増設や観光まちづくり学部の新設をはじめ、法人傘下各校が取り組んできた事業を振り返りつつ記している。テーマごとに全8章で構成されており、教育・研究事業や学生の活躍などに加え、グラフやデータなどで数値からも10年間の推移を振り返ることができるよう、工夫されている。

■精緻な近代工芸で魅了

国学院大学博物館では、創立140周年記念企画展「近代工芸の精華―有栖川宮家・高松宮家の名品と金子皓彦 寄木細工コレクション」を、8月31日から11月6日にかけて開催した。

本学では創立以来、有栖川宮家とその祭祀を継承された高松宮宣仁親王妃喜久子殿下の御高配により、両家のゆかりの品々を拝領し、収蔵している。企画展では、両宮家伝来の品々に加え、寄木細工の世界的コレクションで院友・本学客員教授の金子皓彦氏（昭39卒・72期史）のコレクションを展示した。

有栖川宮家・高松宮家ゆかりの品々からは、宮廷文化を今日に伝える漆工品・金工品を展示。漆工品の一つ「寶石御筆筒」は四季の草花や蝶などの詩絵が精緻に施された名品で、繊細な技巧が来場者を魅了していた。

金子氏のコレクションからは、明治時代に日本から輸出され、海外の人々を魅了した寄木細工が集った。圧巻は日本最大級のライティングビューローで、来場者は華やかな装飾に感嘆の声を上げ観賞していた。同館では、オンラインミュージアムで展示紹介動画を公開しており、来場できなかった方にも展示品の魅力の一端を発信している。二次元コード。



見事な詩絵が施された「寶石御筆筒」(貞明皇后御遺品)



10年の歩みを編み込んだ140周年記念誌



創立140周年「オール国学院で邁進」 彬子女王殿下ご臨席のもと記念式典



明治15（1882）年創立の皇典講究所を母体とする学校法人国学院大学は11月4日、創立から140周年の節目を迎え、彬子女王殿下ご臨席のもとグラウンドプリンスホテル新高輪（東京都港区）で創立記念式典が挙行された。

式典では、国歌を心の中で斉唱し皇典講究所初代総裁の有栖川宮職仁親王が賜った『告諭』を針本正行学長が奉読した後、佐柳正三理事長が150周年に向けた決意を込め「オール国学院で邁進する」とした式辞（要旨別掲）を述べた。続いて彬子女王殿下から「国学院大学

の学生とは新潟での米作りワーカーシップなどで顔を合わせるが、建学の精神がしっかりと実践されていることを実感している。今後も多くの人材を育ててもらいたい」とのお言葉（同）を頂戴した。

来賓祝辞では神社本庁の鷹司尚武総理が「国学院は神道精神に基づいた歴史と伝統ある学園の府。神代から伝わる歴史と文化継承のため不断の努力を続けてきたことに敬意を表する。貴学の役割は神社界だけでなく我が国全体にとって大きな意味を持つ。今後も崇高な建学の精神に基づき教育に努め、人材を輩

出されることを期待してやまない」と述べた。また、本学と同じく皇典講究所を母体とする学校法人日本大学の林真理子理事長は「国学院大学は常に国文学のリーダーとしての役割を果たし、新しい分野へ果敢に挑む姿勢にも尊敬の念を抱く」とし、国学院大学院友会の吉田茂穂会長は「140周年の年に観光まちづくり学部が開設された。母校が培ってきた豊かな学園の土壌を通じ地域の持つ多様性に新しい光を当てていくものとして期待する」と140周年を祝った。



初代総裁・有栖川宮職仁親王から賜った『告諭』に述べられている「本ヲ立ツル」「国体の講明」「徳性の涵養」を基盤とする建学の精神は、戦後の新制国学院大学にも継承されている。現代社会が抱える課題は複雑化かつ多様化の一途をたどり、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大は日本人が連綿と伝えてきた民族の良識や伝統までも揺るがしかねない状況にある。このような状況の中で迎える140周年を機に「伝統に立つ改革、そして未来へ」というテーマのもと、新たな中期5カ年計画を策定した。

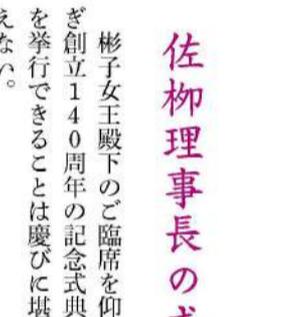
改めて『告諭』の締め括りの言葉「今より後、職員生徒此の意を体し、夙夜懈ること無く、本校の隆昌を永遠に期せよ」に立ち寄り、「オール国学院」で邁進したい。

彬子女王殿下のお言葉（要旨）

明治15年11月4日、有栖川宮職仁親王の『告諭』により皇典講究所が設置されたことが国学院の始まり。『告諭』で職仁親王は「日本の国柄を明らかにし、道徳・道義心を備えた人柄を養い、伝統の中に基づく日本の根本を究明することが学問の道において最も重要」との精神を示され

た。この建学の精神は脈々と受け継がれ、現代の社会の中でも国学院らしさを持つているように感じている。国学院大学の学生には心游舎の米作りワークショップなどに参加してもらっているが、「何気なく食べているお米だが、口に入るまでにどれだけの苦労があるか分かり、一粒一粒も大切に食べようと思った」などと話すのを聞くとき誇らしい気持ちになる。ワークショップ以外でも農作業の手伝いをした人もおり、建学の精神はしっかりと実践されていると改めて実感する。

創立140周年の節目の年に改めて建学の精神に思いを致し、これからも大切に思える人たちを育てていただくことを願う。



佐柳理事長の式辞（要旨）

彬子女王殿下のご臨席を仰ぎ創立140周年の記念式典を挙行できることは慶びに堪えない。

「平和だからこそ守られる文化遺産」 奈良国立博物館・井上館長が記念講演

創立140周年記念式典に合わせた記念講演では、奈良国立博物館の井上洋一館長（昭54卒・87期史、昭57修・90期博前史、昭60修・93期博後史）が「文化遺産と社会」と題して講演。ロシアのウクライナ侵攻などによる文化財破壊を憂慮し、「文化遺産は社会が安定して平和だからこそ守られる。タリバン政権下で貴重な文化財を守り抜いたアフガニスタンには、『自らの文化が生き続ける限り、その国は生きながらえる』との言葉があるが、今こそこの言葉を胸に刻んでほしい」と訴えた。



井上館長が講演した体験談

本学で日本考古学を専攻した井上館長は東京国立博物館などで要職を歴任し、令和3年4月に奈良国立博物館長に就任。この間、シリアなどの要請を受けた遺跡調査や文化財保存活動にも従事してきた。講演では「文化遺産とは共存する集団の歴史・伝統・風習などを集約したもの。ユネスコの世界遺産は人類共通の宝物で、令和3年7月時点で1154件があり、日本には『北海道・北東北の縄文遺跡群』など文化遺産20件、自然遺産5件がある」と紹介。さらに「その経済効果は文化の振興に再投資されている」とした。

世界各地で文化遺産が破壊される惨状を憂う井上館長は「ウクライナでは宗教施設を中心に164件も破壊されたというが、これこそ文化の破壊に他ならない」と言葉を強め、イスラム圏での原理主義集団や軍隊による遺跡破壊についても「調査の打ち上げを行った円形劇場で公開処刑が行われたり、現地にどまった博物館長が処刑されたりもした」と報告した。

一方で、「タリバン政権下で命を懸けて秘匿された遺物を紹介した『黄金のアフガニスタン展』は世界を巡回し、文化財保護のチャリティに寄与している」と報告した。また、自然災害が相次ぐ日本については「東日本大震災の被災者から『人々の気持ちが一つになれる祭は重要だ』との声を聞く。平和を守るために異なる価値観を共有することの大切さを教えてくれるのが文化遺産だ」と強調した。



創立140年の

節目を迎えた

学校法人国学院大学。

法人経営をけん引する

佐柳正三理事長と

大学の教学の責任者である

針本正行学長に、

今年4月にスタートした

「学校法人国学院大学

中期5カ年計画」を踏まえ、

150年に向けた

針路を聞いた。



建学の精神を忘れず、



学校法人国学院大学
佐柳正三理事長

140年にわたり学統を守り抜いてきた先人の苦勞のもとに今日がある。法人は明治15(1882)年に創立された皇典講究所が母体で、終戦直後は連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)による神道指令(昭和20年)で存続の危機に陥った時期もある。当時の役教職員、関係者らが教育機関としての存続のために奔走し、昭和23(1948)年に新制大学として再出発を果たした。理事長という立場は歴史や建学の精神を伝える役割もある。学統を守り、法人の発展と充実を第一に経営

を進めていく。今、学校法人を取り巻く環境は厳しさを増している。直面する大きな課題の一つが少子化だ。国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、18歳人口は令和14(2032)年には初めて100万人を割り、約98万人となり、さらに令和22(2040)年には約88万人にまで減少する。全学を挙げて対策を立てねばならない喫緊の課題だ。大学の新学部開設はその一つで、平成21年に開設した人間開発学部につき、今春、観光まちづくり学部を新設し

た。観光まちづくり学部は、独自の歴史や文化を有する地域を見つめ、地域に貢献する人材を育てることが狙いだ。加えて既存学部のブラッシュアップも大切になる。スピード感を持って取り組むたい。高次連携も強化する。法人傘下校には国学院大学北海道短期大学部、国学院高等学校、国学院大学久我山中学・国学院幼稚園、国学院大学附属幼稚園、国学院幼稚園、系列校に国学院大学栃木学園があるが、加えて全国に協定校を広げたい。他大学ではM&Aを進める

学統を守り、法人の発展を第一に

動きが出てきているが、系列校や協定校との連携強化は今後、少子化対策の重要事項の一つとなるだろう。また、一貫教育を行う法人として小学校がないことは長年の課題だ。時間はかかるが、設置に向けて取り組みたい。

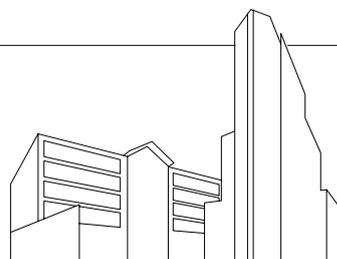
令和4年度から5カ年の新中期計画がスタートした。創立150周年に向け、法人組織を強化するとともに、絶えず変化する環境に対応できる人材を積極的に養成し、社会に貢献する学校法人を目指すことが法人の基本方針だ。

中でも重要なのが人材育成だ。そのためには、最新の教育政策など専門知識の習得などの、いわゆるリスクリンクが必要だ。大学では職員の大学院進学を奨励し、学費の一部を補助する支援策を行っている。既に大学院で大学経営について複数の職員が学んでいる。今後は大学以外の職員にも対象を広げたい。外部人材の採用も積極的に進める。

国学院大学は神職を養成しているが、神職は地域から頼られる存在として活躍している院友が多い。地域の中心になる人材を育てることも教育の原点だ。今回の中期計画では基本方針の達成に向けて4つの柱を掲げた。達成のためにはPDCA(計画、実行、評価、改善)サイクルを回さねばならない。特に財政面では10年、20年先を見据える必要がある。

創立150年に向けてDX推進や人材育成を加速させる。教職員には積極的に政策提案してもらいたい。一人一人が担当部署の課題を見つけ改善点を提案することは、法人運営において非常に重要になる。ボトムアップの提案は組織を強くするだろう。(談)

▶DX(Digital Transformation) デジタル・トランスフォーメーション。ビジネス環境の激しい変化に対し、企業がビッグデータやデジタル技術・情報通信技術などを活用し、顧客や社会のニーズを捉え、製品・サービスやビジネスモデルを変革することで、業務改善にとどまらず組織・企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること。





新型コロナウイルスの感染拡大によって、大学の学びの様相は大きく変わった。コロナ禍以前はデジタル技術を駆使して授業する教員は少なく、デジタル機器を活用する前に、リモート授業をどう展開するのかが悩んだ。学生側も、リモート授業になって、予習、復習に加えて課題に充てる時間が増え、授業外の学修時間が大幅に増加した。

リモート授業の実践を通して、リモート授業の方が教育効果の上がる科目がある一方、対面で議論して互いの感じ方を話し合う方がふさわしく、深い学びを得られる科目があることもわかってきた。新たな授業形態、多様な学びのあり方が工夫され、試行されている。コロナ禍は、教育・学修のあり方をあらためて問い直すきっかけになった。

大学教育を巡っては、中央教育審議会大学分科会が課題を提起している。「総合知の創出・活用を目指した文理横断・文理融合教育」と、「密度の濃い主体的な学びを可能とする学修者本位の教育の実現」、「大学の強みや特色を活かした連携・統合・再編の必要性」の3点だ。

いずれも本学にとって重要な問題であるが、外部環境の客観的評価と内的省察をしっかりと行い、本学らしい対応をしたい。文理を問わず、真に主体的な学びの実現には、「知の道程に思いを致すこと」が重要だ。今は文章を書くとき、ワードなどのソフトやアプリが漢字の候補を示す。昔は辞書を引いて、自分の言葉で他者にどう伝えるかを考えた。与えられた表現を選ぶよりも、悩みながら言葉を探る過程のほ

共に学び、知を新たにする場に



国学院大学
針本正行学長

伝統と改革を今こそ

うが大切。教えられた法則も、それが導かれた経緯を知ること、法則の本質に迫る糸口になる。新たな法則や未だの問題についても意識できる。既存の知を疑うことが、その第一歩となる。

中期5カ年計画では、本学の将来像として、「知の創造。日本をみつめ、未来をひらく」を掲げた。大学は、単なる知識伝達場ではない。多様性を尊重しつつ学び合う営みのなから、新たな知を創造し、未来をひらく大学を目指したい。

その将来像を具現化するために大学の教育目標を「問い直す」、「学び合う」、「共に生きる」とした。既存の知を問い直し、教員と学生、学生と学生が共に学び合う場にする中で、共生社会を生きる人材を育成していく。

共に学び合うことについて、『論語』では「他人が自分を認めてくれないからといって不平不満を言うことはない」（学而篇）と説いている。自説を受け入れない他者の意見に対して、感情的に否定せず、むしろ批判されることによって、自分の考え方を深めることができるという。3つの教育目標は、多様な価値観を認め合う社会において、この先もずっと、人々の生き方やあり方を問うものである。

教員と学生との接し方も、大きく変わる。同じ問題意識を持っている人たち、学部学科を超えて集まり、人々との関わり合いを実感できる学びを提供する。

このような学びを通じて、絶えず変化する環境に対応できる人材、現代社会の新たな課題に積極的に関わっていくことができる人材の育成に努める。同時に「日本」を究める教育研究を推進し、広く世界に向けて発信していく。

(談)

▶神道指令 昭和20(1945)年12月15日、日本を占領したGHQより、「国家神道・神社神道ニ対スル政府ノ保証・支援・保全・監督及ビ弘布ノ廃止ニ関スル件」との標題で出された覚書。神道・神社を国家より分離することを指令した。これにより、神社の国家管理制や公教育における宗教教育、国家・地方公共団体による宗教儀式の実施などが禁止された。27年の講和条約発効とともに、効力はなくなったが、趣旨は日本国憲法に継承されている。

▶M & A (Mergers and Acquisitions) 2つ以上の企業が一つに合併(Mergers)される、あるいは企業が他の企業を買収(Acquisitions)すること。提携までを含める場合もある。



創立140年の節目を迎えた学校法人国学院大学。法人経営をけん引する佐柳正三理事長と大学の教学の責任者である針本正行学長に、今年4月にスタートした「学校法人国学院大学中期5カ年計画」を踏まえ、150年に向けた針路を聞いた。



学校法人国学院大学 佐柳正三理事長

140年にわたり学統を守り抜いてきた先人の苦労のもとに今日がある。法人は明治15（1882）年に創立された皇典研究所が母体で、終戦直後は連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）による神道指令（昭和20年）で存続の危機に陥った時期もある。当時の役教職員、関係者らが教育機関としての存続のために奔走し、昭和23（1948）年に新制大学として再出発を果たした。理事長という立場は歴史や建学の精神を伝える役割もある。学統を守り、法人の発展と充実を第一に経営を進めていく。

今、学校法人を取り巻く環境は厳しさを増している。直面する大きな課題の一つが少子化だ。国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、18歳人口は令和14（2032）年には初めて100万人を割り、約98万人となり、さらに令和22（2040）年には約88万人にまで減少する。全学を挙げて対策を立てねばならない喫緊の課題だ。大学の新学部開設はその一つで、平成21年に開設した人間開発学部を継ぎ、今春、観光まちづくり学部を新設し

建学の精神を忘れず、

伝統と改革を今こそ

新型コロナウイルスの感染拡大によって、大学の学びの様相は大きく変わった。コロナ禍以前はデジタル技術を駆使して授業する教員は少なく、デジタル機器を活用する前に、リモート授業をどう展開するのかが悩んだ。学生側も、リモート授業になって、予習・復習に加えて課題に充てる時間が増え、授業外の学修時間が大幅に増加した。

リモート授業の実践を通して、リモート授業の方が教育効果の上がる科目がある一方、対面で議論して互いの感じ方を話し合う方がふさわしく、深い学びを得られる科目があることもわかってきた。新たな授業形態、多様な学びのあり方が工夫され、試行されている。コロナ禍は、教育・学修のあり方をあらためて問い直すきっかけになった。

大学教育を巡っては、中央教育審議会大学分科会が課題を提起している。「総合知の創出・活用を旨とした文理横断・文理融合教育」と、「密度の濃い主体的な学びを可能とする学修者本位の教育の実現」、「大学の強みや特色を活かした連携・統合・再編の必要性」の3点だ。

いずれも本学にとって重要な問題であるが、外部環境の客観的評価と内的省察をしっかりと行い、本学らしい対応をしたい。文理を問わず、真に主体的な学びの実現には、「知の道程に思いを致すこと」が重要だ。今は文章を書くとき、ワードなどのソフトやアプリが漢字の候補を示す。昔は辞書を引いて、自分の言葉で他者にどう伝えるかを考えた。与えられた表現を選ぶよりも、悩みながら言葉を探る過程のほ

うが大切。教えられた法則も、それが導かれた経緯を知ること、法則の本質に迫る糸口になる。新たな法則や未来の問題についても意識できる。既存の知を疑うことが、その第一歩となる。

中期5カ年計画では、本学の将来像として、「知の創造。日本をみつめ、未来をひらく」を掲げた。大学は、単なる知識伝達場ではない。多様性を尊重しつつ学び合う営みのなかから、新たな知を創造し、未来をひらく大学を目指したい。

その将来像を具現化するために大学の教育目標を「問い直す」、「学び合う」、「共に生きる」とした。既存の知を問い直し、教員と学生、学生と学生が共に学び合う場にする中で、共生社会を生きる人材を育成していく。

共に学び合うことについて、「論語」では「他人が自分を認めてくれないからといって不平不満を言うことはない」（学而篇）と説いている。自説を受け入れない他者の意見に対して、感情的に否定せず、むしろ批判されることによって、自分の考え方を深めることができるという。3つの教育目標は、多様な価値観を認め合う社会

共に学び、知を新たにする場に



国学院大学 針本正行学長

学統を守り、法人の発展を第一に

動きが出てきているが、系列校や協定校との連携強化は今後、少子化対策の重要事項の一つとなるだろう。また、一貫教育を行う法人として小学校がないことは長年の課題だ。時間はかかるが、設置に向けて取り組みたい。

令和4年度から5カ年の新中期計画がスタートした。創立150周年に向け、法人組織を強化するとともに、絶えず変化する環境に対応できる人材を積極的に養成し、社会に貢献する学校法人を目指すことが法人の基本方針だ。中でも重要なのが人材育成だ。そのためには、最新の教育政策など専門知識の習得などの、いわゆるリスクリンクが必要だ。大学では職員の大学院進学を奨励し、学費の一部を補助する支援策を行っている。既に大学院で大学経営について複数の職員が学んでいる。今後は大学以外の職員にも対象を広げたい。外部人材の採用も積極的に進める。

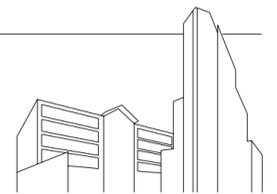
国学院大学は神職を養成しているが、神職は地域から頼られる存在として活躍している院友が多い。地域の中心になる人材を育てることも教育の原点だ。今回の中期計画では基本方針の達成に向けて4つの柱を掲げた。達成のためにはP D C A（計画、実行、評価、改善）サイクルを回さねばならない。特に財政面では10年、20年先を見据える必要がある。

創立150年に向けてDX推進や人材育成を加速させる。教職員には積極的に政策提案してもらいたい。一人一人が担当部署の課題を見つけ改善点を提案することは、法人運営において非常に重要になる。ポトムアップの提案は組織を強くするだろう。（談）

▶神道指令 昭和20（1945）年12月15日、日本を占領したGHQより、「国家神道・神社神道二対スル政府ノ保証・支援・保全・監督及ビ弘布ノ廃止ニ関スル件」との標題で出された覚書。神道、神社を国家より分離することを指令した。これにより、神社の国家管理制や公教育における宗教教育、国家・地方公共団体による宗教儀式の実施などが禁止された。27年の講和条約発効とともに、効力はなくなったが、趣旨は日本国憲法に継承されている。

▶M & A (Mergers and Acquisitions) 2つ以上の企業が一つに合併 (Mergers) される、あるいは企業が他の企業を買収 (Acquisitions) すること。提携までを含める場合もある。

▶DX (Digital Transformation) デジタル・トランスフォーメーション。ビジネス環境の激しい変化に対し、企業がビッグデータやデジタル技術・情報通信技術などを活用し、顧客や社会のニーズを捉え、製品・サービスやビジネスモデルを変革することで、業務改善にとどまらず組織・企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること。



神道文化学部開設20周年 西岡学部長に聞く 建学精神堅持し多彩な人材育成



国学院大学の母体である皇典研究所の流れをくむ神道文化学部は令和4年で開設20周年を迎えた。神社界を支える神職を世に送り出し、学部として独立してからも他に類を見ない教育を展開してきた。後継者不足にあえぐ神社界、精神社会にまですそ野を広げるグローバル化などに直面した20年の足跡と今後について西岡和彦学部長（教授）に聞いた。

神道文化学部は開設20周年を迎えた

文学部神道学科の時代は、専門教育はどちらかといえば神道に特化していたので、独立を機に専門教育の領域を広

げることには心掛けてきた。併せて門戸も広げ、先祖代々神社に奉仕してきた社家以外の一般家庭出身者の入学者を増やすことで人材育成に幅を持たせ、さらに神道を含む世界宗教・世界文化に接してもら

おうと努めてきた。

以前は社家出身の学生が7割を占め、そのほとんどは男子学生だったが、現在は一般学生が7割で女子学生も全体の3割を超すまでになった。こうした女子学生の増加で、多様な人材を送り出せるようになった。また、それに合わせて祭式の授業などでは、女子学生にも丁寧かつ分かりやすく正しい所作を身に付けてもらうため、女性の祭式専任教員を採用した。こうして現在、女子学生のための教育環

境も整えつつある。

神社界を取り巻く環境は様変わりしている

門戸を広げ神社界へ送り出す人材が増えたが、都会育ちの学生が増えたことで、有名な神社であっても地方での奉仕を敬遠しがちという問題が生じている。とはいえ、神職は神社を継承するだけではなく、コミュニティーの中心となる場を指導する者として氏子や崇敬者に認められてら

なければならぬ。そのため、そうした使命を踏まえた人材育成を目指している。

この他、グローバル化やIT社会への対応といった課題もある。神道とは社会の中で共に生きるものであって、ただ伝統の遵守やその押し付けをするだけでは、1000年以上も続いてこなかっただろう。社会をリードすると共に、社会の変化にも適切に順応してきたのが神社である。それらを下支えするのが本学部の使命だと思ふ。

神道文化学部ならではの取り組み

「観月祭」や「成人加冠式」といった行事がある。祭典で用いる装束を着用する「加冠式」は、ご家族からの注目度も高い。また、「田んぼ学校」にも取り組んでいる。田植えや稲刈りに従事しつつ、神道に取り込まれる稲への思いや季節の移ろいを体で学んでもらうもので、本学部の特徴である実践型の学びの一つといえる。

これまでの人材育成と今後について

本学部は、神職以外にも宗教全般がカバーできるユニークな社会人を多く輩出してきた。大学院教育では、他大学にはない神道を基礎とした「教え」を習得させ、神職や宗教家を育成すると共に、彼らを育成できる「教育者」や神道学・宗教学の研究者の育成をも目指している。

今後本学部の使命は、建学の精神を堅持しつつ、神道や神社がそうであったように、変動著しいこの社会にも順応できる学生を一人でも多く輩出することに変わりはない。

第12回観月祭

学生が舞、演奏を披露

神道文化学部が主催する第12回観月祭が10月15日、渋谷キャンパスで開催された。観月祭は、平安時代から続く十五夜に満月を観賞する「中秋観月」の伝統に由来するもの。同学部の学生らが古式ゆかしく日本伝統の管弦、祭祀舞、御神楽を披露し、事前抽選に当選した約50人が観覧した。コロナ禍により令和2年度は無観客、3年度は中止となっており、3年ぶりの有観客開催となった。

当日は5号館ピロティに特設舞台が設けられ、はじめに学生が舞台前に神饌を捧げ祭祀を行った。続く管弦では雅楽の中でも有名な曲として知られる「越前」が演奏され、竜笛や笙などの音色による雅やかな調べが会場を包み込んだ。祭祀舞では、「朝日舞」と「浦安の舞」が披露され、色鮮やかな装束に身を包んだ女子学生たちが一糸乱れぬ舞を奉じた。最後の演目は、御神楽が奉じられた。御神楽は、宮中で行われ、天宇受売命が天岩戸の前で舞った神話になぞらえていると言われる。全15曲の組曲から、最後の曲である「其駒」を学生が厳かに舞い、約1時間半にわたる観月祭は終了。3か月間にわたって合同稽古などに励んできた学生たちの姿が観客を魅了した。



鮮やかな装束を身にまとい、学生が舞と演奏を披露

渋谷区長への施策提言コンペ 学生が課題解決へ向け熱弁



学生たちは審査員や他の参加者を前に自らの施策を提言した

本学学生が渋谷区の抱える課題に対して、施策を提言する「渋谷区長への施策提言コンペ」が10月26日、渋谷キャンパスで開催され、学生9グループがプレゼンテーションを行った。

当日は、杉浦小枝・渋谷区副区長、サッポロビール(株)の星野茂男・法人統括部長、針本正行学長の3人が審査員と

と「サイレントマジョリティ(声なき大多数)」の意見を聞くための方策」の2テーマで、全学部の学生を対象に施策を募った。

「はじめに針本学長が「本年度のテーマは、渋谷区とも協議、相談し若者に身近な課題とした。この提言への参加は貴重な経験となるはずだ。ぜひ審査員の心に響く提案がなされてほしい」と期待を込め

あいつつした。発表に立った学生たちは、渋谷区の現状を踏まえつつ、自身のアイデアについて熱弁をふるった。

海外や国内の先進的な事例を取り入れた投票率の改善策や、自身の選挙での体験談と周囲の学生へ行ったアンケート調査をもとにした政治への関心・意欲の向上策などそれぞれの観点からの提言がなされた。ほかに

も、情報通信技術を活用した施策など、若者目線のアイデアに審査員、参加者は真剣に耳を傾けていた。

審査の結果、区長賞には20代の投票率向上のために渋谷駅や商業施設での投票所開設などを提案した佐藤かいらさん(経営3)が選ばれた。サッポロホールディングス賞には、同じく投票率の向上のため、学生や区民が区政に参加するオプザバー制度などを提案した小笠原凛さん、榎原達也さん、柿本隼人さん、宮田慎也さんの法学部1年生グループが、学長賞にはスマートフォンアプリを活用した投票率向上などを提案した宮本周さん(法3)が選出された。

表彰後、杉浦副区長は、「(区長賞の施策は)疑問点を掘り下げ、根拠を持ちつつ若者目線から提言してくれた。これからも、行政や渋谷という街について、ぜひ学生同士で意見交換をしながら、視野を広げていってほしい」と講評を述べた。区長賞に輝いた佐藤さんは「さまざまな社会問題に興味があり、せっかくな機会だからと思いチャレンジした。区長賞を受賞することができ、嬉しい」と笑顔で振り返った。

たまプラーザキャンパスに拠点を置く人間開発学部が、日ごろの教育成果をもとに地域住民へ向けたイベントを開催し、参加者と交流を深めた。

■共育フェスティバル
10月30日に、第13回共育フェスティバルが開催され、地域の親子連れを中心に約540人が来場した。このイベントは、地域の子どもたちへ体験や学び、遊びの機会を提供し、学生も学部での学びを実践するもの。今回は、石けん作り体験などの科学実験「写真左」や、コンサート観賞、手話体験など13企画が用意された。

会場では、一日を通じて学生らと交流を深める様子が見受けられ、キャンパスは子どもたちの歓声に包まれた。

■スポーツフェスティバル
10月23日に、第7回地域交流スポーツフェスティバルが開催され、子どもからシニア層まで約330人が参加した。このイベントは、同地域ヘルスプロモーションセンターが主催。超音波による骨密度測定や子ども向けアスレチックコーナーなど研究・運動施設を生かした8企画が用意された「写真右」。体育館で行われた「いろんな動きを試してみようー苦手な動きを克服しようー」では、鉄棒運動などのコツを学生が子どもたちに伝授。7歳の子どもは「前回りができるようになった」と笑顔で語り、保護者は「近隣に室内で運動できる施設は少なく、子どもは大喜び。このような機会はない」と感想を述べた。



親子でオリジナル石けんを作った科学実験企画



子どもたちがさまざまな運動を体験



賑わいを見せた各支部と滝川市による物産展

ホームカミングデー 3年ぶりに院友が母校に集う

国学院大学の院友（卒業生）やその家族らが年に一度、学び舎に戻る「ホームカミングデー」が10月15日に渋谷キャンパスで開催された。当日は、矢部健太郎文学部長（教授）による特別講演や卒業生有志による企画、院友会各支部の協力による物産展などの企画が用意され、約400組の院友らがキャンパスに集った。

■ 針本正行学長 「母校を楽しんで」

開催にあたり、針本正行学長があいさつに立った。針本学長は、本年が創立140周年であることから、告諭と創立趣意書の一節を紹介。続いて、コロナ禍でのAIや情報通信技術（ICT）の浸透に触れ、「人の生き方を問い直し、社会構造を変革させた」とし「大学教育もあり方が問われた」と振り返った。その上で、対面での授業や課外活動などについて「多様な価値観を実感し、他者を尊重し共に生きる大切さを知れる機会」と述べ、学び舎に集い交流する重要性を語った。最後に、「伝統を保ちつつ社会変化に対応し、未来を担う若者を育てたい」と語り、「秋の母校を楽しんでもらえれば」と締めくくった。

■ 特別講演 歴史学の魅力に触れる

矢部文学部長による特別講演「どうなる家康―豊臣政権研究の新視点から―」には約200人が参加し、専門である織豊期の研究成果を交えた講演に耳を傾けた。

矢部学部長は、歴史学の重要性に触れつつ、「人間だけが持つ『文字』が、歴史の記録を可能にした。我々は、史料を通じて歴史を現代に蘇らせることができる」と語った。また、研究者により解釈は千差万別である



多くの参加者が聞き入った特別講演

ること触れ、「歴史学を含む学問の目的は『良く生きる』とはどういうことなのか』を追求する哲学と共通項をもっている」と解説。その上で、自身の研究から導き出した徳川幕府による「五大老」のねつ造について、根拠を示しつつ論理的に説いた。また、「さまざまな研究成果を踏まえ、歴史を題材にしたテレビや映画作品に触れると、新たな楽しみ方が増える」と紹介。最後に「教科書の内容は日本史が最も変わりやすい。歴史は常に見直されアップデートされていく。通説の矛盾をみつければ、新しい歴史を生み出していく。歴史学は『最先端の学問』だ」とその魅力に触れ締めくくった。

■ 卒業生企画も活況

若木タワー前にはライブステージが設けられた。在学当時、リコーダーアンサンブルで活動していた院友らによる生演奏と、院友を中心に活動する「をどり組」による舞踊「かつほれ」の披露が行われた。院友や学生、キャンパス見学会で訪れた父母らが足を止め、披露を堪能する様子が見受けられた。

ほかにも、院友会の各支部と北海道短期大学部がある滝川市の協力により物産展も設けられ、農作物から伝統工芸品までさまざまな自慢の品を販売。各ブースでは、並べられた品々を紹介しながら、院友同士が会話を交わっていた。

若木育成会 キャンパス見学会 学生の学び舎を探訪

在学生の父母らで組織される若木育成会のキャンパス見学会が10月15日に渋谷キャンパスで、10月30日にたまプラーザキャンパスで開催された。学生が学ぶ環境を見学できる機会とあって大勢の父母らが参加した。昨年まではコロナ禍の影響を受け、オンラインでキャンパス紹介動画を配信する方式となっており、対面での開催は3年ぶり。

渋谷キャンパスでは、約100人が参加。学生によるキャンパスツアーでは、1回約30分で神殿や教室など主要施設を見学。ツアー中には、父母らから案内役の学生に「普段はどのようにキャンパスで過ごしているか」などの質問もあり、大学生活について会話を交わしながら教育研究施設を巡った。学食体験や図書館見学なども開催されたほか、同日に開催されたホームカミングデー企画である特別講演や物産展などにも参加し、キャンパスでの時間を過ごした。

たまプラーザキャンパスでは、約300人が参加し、觀光まちづくり学部の説明会やキャンパスツアーが行われた。当日は、人間開発学部が主催する学生と地域住民の交流イベント「共育フェスティバル」も開催されており、同学部学生らが、日ごろの学びを生かした理科実験や工作、音楽鑑賞会などの企画を通じて、地域の親子と触れ合う姿を父母らが見守った。8面に

関連記事。今後、キャンパス見学会を担当する校友課では、当日参加できなかった父母らに向けた両キャンパスの紹介動画を制作し、大学ホームページで公開する予定。



キャンパスツアーでは学生が父母らを案内[渋谷キャンパス]

インフォダイジェスト

...在学生
 ...保護者
 ...卒業生
 ...一般
 ...受験生

内容
 日にち
 時間
 場所
 対象
 定員
 料金
 申し込み
 問い合わせ

大学からのお知らせ

令和5年度 一般選抜入試のご案内

来年度の一般選抜入試を右表の日程で実施します。V方式とA日程を同時出願した場合など、2回目以降の受験料を割引する応援割も用意。詳細は本学HP（二次元コード）で「入学試験要項」を確認してください。
 ※本学の一般選抜入試は受験ポータルサイト「UCARO」上でのインターネット出願となります
 問入学課（☎03・5466・0141）

卒業式、卒業証書・学位記並びに修了証書授与式について

日 令和5年3月19日(日)

【卒業式】

場 グランドプリンスホテル新高輪 宴会場「飛天」

対・時

- ▶法学部・人間開発学部=10時～
 - ▶経済学部=12時30分～
 - ▶文学部・神道文化学部、専攻科・別科=14時30分～
- 【卒業証書・学位記、修了証書などの授与】

対・時・場

- ▶法学部=12時30分～、渋谷キャンパス

- ▶人間開発学部=13時～、たまプラーザキャンパス
- ▶経済学部=14時45分～、渋谷キャンパス
- ▶文学部・神道文化学部、専攻科・別科=16時45分～、渋谷キャンパス

※新型コロナウイルス感染対策のため、参列は学生のみとなります

問総務課（☎03・5466・0111）

令和5年度 一般選抜入試日程

入試制度	試験日	出願期間（消印有効）	合格発表日
V方式（大学入学共通テスト利用入試）	1月14日(土)・15日(日) 本学個別試験なし	1月4日(水)～13日(金)	
A日程 (全学部統一)	3教科型	2月2日(木)	2月15日(水)
	得意科目重視型	2月3日(金)	
	学部学科特色型	2月4日(土)	
B日程（後期）	3月2日(木)	1月4日(水)～2月21日(火)	3月11日(土)

※試験科目などの詳細については本学HPで確認してください

イベント

令和4年度国際研究フォーラム 「ミュージアムでみせる宗教文化」

宗教文化を学ぶ際に、文字だけではなく物体としてのモノや、実践としてのコトも欠かせない重要なもの

博物館

無料
 日 10時～18時(最終入館17時30分)。祝日を除く月曜休館
 ※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

特別展「走湯山と伊豆修験 —知られざる山伏たちの足跡—

かつて伊豆国には数多くの修験者たちがいました。彼らが拠った走湯山は、かつて「走湯権現」「伊豆権現」などと呼ばれ、広く信仰を集めた東国固有の霊場です。本展では、日本独自の宗教である修験道の成り立ちや、開祖とされる役行者神変大菩薩について触れ、伊豆修験の姿について紹介します。また、12月11日までの期間限定で国宝「走湯権現当峯辺路本縁起集」（称名寺蔵）を展示します。

日 開催中～1月22日(日)

場 博物館企画展示室

のです。このフォーラムでは、モノ・コトを見せる場としてのミュージアムに焦点を合わせ、その実践や可能性について考えていきます。申し込みは本学HP（二次元コード）から。

日 12月11日(日)

時 13時～17時30分

申 12月4日まで（先着順）

料 無料

問 研究開発推進機構事務課（☎03・5466・0104）

和田利政名誉教授逝去

国学院大学名誉教授の和田利政氏が6月19日に逝去。97歳。

和田氏は大正14年生まれ。昭和26年国学院大学国文科卒。国学院大学文学第二研究室助手などを経て、30年文学部専任講師、36年助教授、44年教授。平成7年定年退職、名誉教授。在職中は入学試験担当委員長などを歴任した。

専門は国語学、敬語史研究。著書に「日常語面白事典—ちょっと変だぞ、あなたの日本語びっくりワード・ウォッチング」（主婦と生活社）のほか、「旺文社国語辞典」の編さんにも携わった。

キャリアサポート

「就活体験記」「ES」の提出に協力を

4年生を対象に就職活動で内定・合格もしくは、最終選考まで進んだ企業（団体）の「就活体験記」、書類選考を通過した企業（団体）へ実際に提出した「エントリーシート（ES）・履歴書」の提供をお願いしています。

提出いただいた「就活体験記」は個人情報を削除し本学学生のみが閲覧可能なキャリアサポートサイトと窓口で公開します。「ES・履歴書」は、個人情報を削除し、閲覧を希望する学生に窓口で開示します。

4年生の皆さんの経験は、後輩にとって大変貴重な資料ですので、ぜひご協力をお願いいたします。提出手順は大学HPでご確認ください＝二次元コード。

ご提出いただいた方には、累計件数に応じ非売品の「大学オリジナルフリクションペンもしくは多色ペン」を差し上げます。

下級生の皆さんは、先輩たちの体験談を参考にしてみたいでしょうか。「キャリアサポートサイト」もしくは窓口でお待ちしています。

問 キャリアサポート課（☎03・5466・0151）

山本有三の「路傍の石」の中で、吾一少年は、鉄橋の欄干にぶら下がるという行為に対して教師から厳しく叱責されます。「たったひとりしかいない自分を、たった一度しかない人生を、ほんとうに生かさなかつたら、人間、生まれてきたかいないじゃないか。」
 吾一という名には、世界中に我々吾ただ一人の存在であるという意味が込められている、と論じられます。まさに「尊在感」づくりの「コマ」です。今回は、尊在感づくりについて「持ち場づくり」の視点で考えましょう。

あなたの子ども「席」(ポジション)はありますか？ 今日、社会で、職場で、学校で、そして家庭で、掛け替えない存在としての持ち場が得られているでしょうか。「場を得て、子どもは光る」。私自身、この言葉を使って、荒れた中学校を地域やマスコミに評価されるまでに立ち直らせたことがあります。それは、学校訪問時に目にした壁新聞の表題の一つから始まりました。

「あなた班長、私ただの人」。班長には存在感がある。だが、自分のようなその他の人間は、「お客さん、おまけ、付録」の存在でしかない、という人生諦め宣言に思えました。ここから、生徒一人一人の持ち場づくりに向けた教育活動の全面見直しの戦いが始まりました。それは、班長の居ない班づくり(班長中心の「アーモンドチョコ班」から、誰もがリーダーの「金平糖班」へ)、「一人一役活動」、1日1回は教師の声かけが保障されるよう授業毎に授業者が出席簿に書き込む「スキんシップ大作戦」など、です。校長が「殺人以外は何でもあり」と豪語した学校が、3年後には、挨拶が行き交い、街を花いっぱいにするボランティア活動などで表彰される学校へと変貌しました。コロナ禍の学生たちは、社会で持ち場を失い、「損在」感に陥っています。それでは、家庭ではどうでしょうか。実は、家庭はそれだけでなく、社会学の視点から言えば、壊れやすい

「いただきます係り」から始めました。「あなたのお子さんの「席」はありますか」。もう一度、自問してみてください。

「尊在感」づくり(2) 子どもの「席」(持ち場)はありますか？



名誉教授 新富 康央

しんとみ・やすひさ
 学校法人国学院大学特別参事。人間開発学部初代学部長、専門は教育社会学、人間発達学。新しい時代の子育て論には定評。

硬式野球部 2シーズンぶりリーグ制覇 三つ巴の優勝争い制す

東都大学野球1部秋季リーグが全日程を終え、国学院大学硬式野球部が2シーズンぶり4度目の優勝を果たした。

最終第5週は亜細亜大学と対戦し、10月18日の第1戦では、0-3と敗れ3位に後退する。

19日の第2戦では0-0で延長戦に突入した十回表、1死二・三塁から富田進悟選手(健体2)の右適時打で2点を先制する。同回裏に1点を返されるも2-1で勝利し2位に浮上。優勝争いは青山学院大学、中央大学との三つ巴となり、最終

戦で決することとなった。

25日の第3戦は三回表、2死一・二塁から青木寿修選手(経ネ4)と田中大貴選手(健体2)が適時打を打ち3点を先制する。その後、4-1で迎えた九回裏、亜細亜大が1点を返し食い下がるも、抑えの楠茂将太投手(法4)が最終打者を打ち取り、4-2で勝利。勝率でトップに立ちリーグ制覇に輝いた。先発の武内夏暉投手(健体3)は八回を3安打に抑え4勝目を上げた。優勝の瞬間、ベンチから飛び出した選手とナインらはマウンド上で抱き合い喜びを爆発させ、スタンドからは大きな拍手が贈られた。

試合後、鳥山泰孝監督は「春季リーグ後、4年生に『どうすれば優勝できるか』と問い、挙がってきた『答え』に全員で取り組んだ結果だ」と選手たちを称えた。

古江空知主将(健体4)は「4年生全員でチームのためにできることをやろうと臨んだ。最上級生の役割を果たせたと思う」と充実した表情で語った。秋季表彰選手には、最高殊勲選手に武内投手、最優秀投手に楠茂投手、首位打者に田中選手が選出された。

同部は11月18日から開催される明治神宮大会に東都大学野球連盟代表として出場し、学生野球日本一を目指す。



満面の笑みでガッツポーズする選手と指導者

順位	大学名	勝	負	分	勝率	勝点
1	国学院	9	4	0	0.692	4
2	中央	8	4	0	0.667	4
3	青山学院	7	5	0	0.583	3
4	亜細亜	6	7	0	0.462	2
5	日本	4	8	0	0.333	1
6	駒沢	3	9	0	0.250	1

硬式野球部 田中千晴選手 巨人が3位指名 「持ち味生かし、活躍見せたい」

プロ野球ドラフト会議が10月20日に実施され、国学院大学硬式野球部の田中千晴投手(神文4)が読売ジャイアンツから3位で指名を受けた。

田中投手は、浪速高校(大阪府)出身で、189cmの長身から繰り出す最速153kmのストレートと得意のフォークボールを生かし緩急をつけたピッチングが持ち味。

当日は、田中投手と指導者、部員らがたまプラーザキャンパスで会議の行方を見守った。指名の瞬間、田中投手は安堵の表情を見せた後、満面の笑みで部員らと喜びを分かち

合った。記者会見に臨んだ田中投手は、「プロになることを夢見て入学した。今まで応援してくれた両親や周囲の方々に感謝したい」と感慨深く語り、「1軍で活躍する姿を見せ『田中の投球を見たい』と思ってもらえるような投手になりたい。将来はメジャーに挑戦したい」と力を込めた。鳥山泰孝監督は、「怪我に悩まされても、地道な努力を怠らなかった。息の長い選手となって活躍してほしい」とエールを贈った。

同部投手の指名は平成30年の清水昇選手(東京ヤクルトスワローズ)以来、4年ぶり。



胴上げされる田中投手

ソフトテニス部

関東1部リーグ 男子2位、女子3位と奮闘



初の1部で健闘したソフトテニス部女子(同部提供)

関東学生ソフトテニス秋季リーグ戦が10月1、2日、サニーテニスコート(千葉県白子町)を会場に行われ、男女とも1部に所属する国学院大学ソフトテニス部は男子が2位、女子が3位となった。

男女1部リーグは6大学で構成され、学生全国大会上位の強豪校が集う。各大学と男子5試合、女子3試合で対戦し勝敗を決する方式で行われた。

男子は初戦の法政大学に0-5と敗れたが、続く明治大学、早稲田大学に競り合いの末、それぞれ3-2で勝利を収めた。第4戦の東海大

学戦は2-3で敗れるも、最終の日本体育大学戦では、今季全日本インカレ団体戦の優勝校を相手に4-1と圧勝。3勝2敗・勝点3となり春季リーグに続き準優勝となった。

春季2部リーグで優勝した同部女子は、初の1部リーグ戦に臨んだ。初戦の日本体育大学戦は1-2と敗れたが、続く東京女子体育大学、明治大学、早稲田大学にはそれぞれ2-1と立て続けに勝利。第5戦の青山学院大学にも2-1で勝利を収め、4勝1敗、勝点4で3位となった。勝敗数では上位2校と並び、三つ巴の優勝争いを繰り広げ初の1部で存在感を示した。

K:DNA——創立140年目を迎えた国学院大学の「遺伝子」…個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

陸上競技部

全日本大学駅伝準優勝 総合力で初の表彰台

秩父宮賜杯第54回全日本大学駅伝対校選手権大会が11月6日、熱田神宮西門前（愛知県名古屋）から伊勢神宮内宮宇治橋前（三重県伊勢市）までを繋ぐ全8区間・106.8kmのコースで開催された。オープン参加2チームを含む全27チームが争う中、国学院大学陸上競技部は5時間10分8秒で準優勝に輝いた。

1区の島崎慎愛選手（経営4）が先頭と47秒差の17位で2区の山本歩夢選手（健体2）に襷を繋ぐと、山本選手は先行する大学を次々と捉え、10人抜きで快走で7位へ浮上する。3区の主将・中西大翔選手（健体4）も上位陣を必死に追走し、さらに順位を上げ6位で襷リレー。4区の藤本

竜選手（法4）は冷静な走りで明治大学、創価大学を捉え4位に押し上げた。5区の青木瑠郁選手（健体1）は序盤で順天堂大学を追い抜くと、中継所で47秒先行していた早稲田大学も抜き去り2位へ浮上。区間賞を獲得する見事な活躍で上位争いの流れに乗せ、レースは後半戦へ突入した。

6区の坂本健悟選手（経4）は、順天堂大学の追い上げを受けるも意地を見せ中継所では2校が並んで襷リレー。7区の平林清澄選手（経営2）は驚異的な区間新記録を出した青山学院大学に追い抜かれるも同区間日本人歴代3位のタイムで3位を死守した。2年連続アンカーとなった8区の伊地知賢造選手（健体3）は、青山学院大学を猛追。じりじりと差を縮め、15km過ぎについに逆転し2位に浮上すると、そのまま大歓声を受けゴールに飛び込んだ。

同部は本駅伝初の表彰台となり、これで学生三大駅伝全てで表彰台に立った（出雲駅伝・令和元年度優勝、4年度準優勝、箱根駅伝・元年度3位）。優勝は駒沢大学で5時間6分47秒の大会新記録。本学のタイムも従来記録を上回る大会新記録だった。



見事に区間賞を獲得した青木選手



©月刊陸上競技

10人抜きの快走・山本選手（左）と中西主将の襷リレー

総合順位（上位8校）

順位	大学名	記録
1	駒 沢	5:06:47 (大会新)
2	国 学 院	5:10:08 (大会新)
3	青山学院	5:10:45 (大会新)
4	順 天 堂	5:10:46 (大会新)
5	創 価	5:12:10
6	早 稲 田	5:12:53
7	中 央	5:13:03
8	東 洋	5:13:10

個人成績

区間	氏名	学年	タイム	区間順位	総合順位
1	島崎 慎愛	経営4	27:45	18位	17位
2	山本 歩夢	健体2	31:58	7位	7位
3	中西 大翔	健体4	34:13	6位	6位
4	藤本 竜	法 4	34:04	4位	4位
5	青木 瑠郁	健体1	35:50	1位	2位
6	坂本 健悟	経 4	37:47	6位	3位
7	平林 清澄	経営2	50:58	4位	3位
8	伊地知賢造	健体3	57:33	2位	2位

※区間順位はオープン参加2チームを含む

柔道部

全日本学生柔道体重別団体 4大会連続ベスト8

団体での学生日本一を争う男子第24回・女子第14回全日本学生柔道体重別団体選手権が10月15、16日にベイコム総合体育館（兵庫県尼崎市）で開催され、国学院大学柔道部は男子の部でベスト8入りを果たした。

男子の部は、全53大学が参加。代表選手7名による点取り式のトーナメント戦で実施し、試合は階級別に行われた。

同部は一回戦シードとなり、二回戦から登場。15日には甲南大学（兵庫県）と対戦し、先鋒の押領司龍星選手（経営4）が勝利すると、4番手からは後藤颯太選手（健体1）、斉本研アレクサンドル選手（健体4）、羽田野啓太選手（健体2）、宮部真臣選手（観まち1）と立て続けに勝利し、5-0と圧倒した。翌16日の三回戦では帝京平成大学（東

京都）と対戦。2番手の後藤選手、3番手の羽田野選手が勝利を収めると7番手で大将を務めた騰川雄一朗選手（法3＝写真）も勝利を収めベスト8進出を決めた。準々決勝では、本大会を連覇中の強豪、東海大学と4大会連続となる対戦。同大が重量級で勝負を決める戦略で各試合に臨む中、軽量級を得意とする同部は果敢に攻めの姿勢を見せた。結果は惜しくも0-3で敗れたものの、4大会連続ベスト8となった。優勝は、決勝で東海大を破った天理大学。

試合後、坂本大記監督は「昨年は東海大学に1-6で敗れた。確実に差は縮まっている。壁は厚いが、打ち破れば優勝も現実の目標として見えてくる」、川上智弘コーチは「団体戦は個人戦と異なる重圧がある。選手が実力を遺憾なく発揮できるよう、一丸となって努力したい」と振り返った。



81kg級代表として試合に臨む騰川選手（左）